－所蔵作品紹介－

北山　善夫　KITAYAMA Yoshio

思いでの思いで

おもいでのおもいで

作品データはこちら

昭和60年10月に、当館で「木の美 - 絵画と彫刻のあいだ」展が開かれました。この展覧会は現代造形の分野で近年注目を浴びている木を素材とした作品のスポットをあて、その多様な表現の一断面を紹介するものでした。また同時に1960年代以降から顕著になってきた従来の絵画や彫刻の枠におさまらないレリーフ状の表現形式にも焦点をあて、その形式と木という素材との出会いを紹介しようとしたものです。

出品作家はこの分野のパイオニア的存在の斎藤義重をはじめとする14作家でしたが、この中で近年めざましい活躍をみせている若手作家の一人が北山善夫です。彼は1948年、滋賀県生まれ。1980年代にはいってから大阪、京都、東京などで個展を開く一方、1982年のヴェニスビエンナーレ展、1983年の日本現代美術展（デュッセルドルフ市立美術館）、バングラデシュビエンナーレ展などに出品するなど国際的にも活躍しており、1985年にはアメリカ国務省奨学金で留学も果たしています。

北山善夫の作品の特色は、むろん木を主な素材としている点ですが、このほか竹や和紙、皮、鉛など多様な素材を用い繊細でありながら同時にしなやかな強さや華麗さをあわせもつ点にもあります。「思いでの思いで」は「木の美 - 絵画と彫刻のあいだ」展などに出品された彼の代表作の一点ですが、その特色をよく伝えてくれるものです。

まるで御輿のような形態のユニークさもさることながら、壁から手前の現実の空間に静かに現れ出てきたようなデリケートな空間構成もみのがすことはできません。作品の下部の枝に沿って赤い糸が用いられていますが、それはデリケートな構成をひきしめています。難解な表現の多い現代美術において、この作品はある親しみやすさをもっているといえるでしょう。それはきわめて日本的な表情をもっているからかもしれません。そしてまた題名のユニークな美しさも、この作品を魅力的にしている一因といえるでしょう。

旭川美術館だより「氷華」No.14（1987.３発行）「収蔵作品から」より